三島由紀夫の身の上相談
―三島の小説と女性誌との相関性―

Duncan Adam

この発表は、昭和30年代のものを中心に、三島由紀夫の何冊かの小説と同時代の女性誌との類似点を指摘することを目論むもので、その類似点が三島の一種の文芸戦略であったかを探るものである。

三島は、「純文学」の大作と同時に、昭和25年初刊の『純白の夜』を始めに、年１冊程度のペースで娯楽小説／中間小説も出版した。その小説の多くが文芸誌より発行部数の多い婦人雑誌／女性誌の連載小説として出版された。『純白の夜』（「婦人公論」）があれば、『永すぎた春』（「夫人倶楽部」昭31・１～12)、『お嬢さん』（「若い女性」昭35・１～12)、『肉体の学校』（「マドモアゼル」昭38・１～12)、『音楽』（「婦人公論」昭和39・１～12)、『夜会服』（「マドモアゼル」昭41・９～42・８）もある。また、「群像」に連載されたが、単行本が昭和32年の２番目のベストセラーにもなった『美徳のよろめき』も、内容から見て、同様な娯楽小説の例だと言える。

大衆雑誌に連載できるような、読み易さと娯楽性のある小説を書くことが三島の一種の競争戦略だったとすれば、その内容もそうだったのではないか。これらの小説の共通点としては、主人公が女性であることだけではなく、小説の中で取り上げられるテーマもある。婚約と新婚生活の問題、女性の一人暮らし、性生活、精神問題 、姦通、妊娠中絶などの問題が小説の焦点だったが、女性誌の記事や特集や身の上相談欄も同様な話題を扱っていた。つまり、三島は 娯楽小説の読者である若い女性の人間関係、愛情、性欲等に関する観念への関心を 小説に反映させることを セールスポイントとして 上手く利用したとも言えよう。また、三島自身が同雑誌に記事の対象と作者として出たことはその自己宣伝の成功の証拠となる。

しかし、このような小説内容は作者の単なる商売策略だったのか、それとも女性のセクシュアリティに関する新しい思想を表現したのか。三島のような男性作家がこの分野で何らか画期的な役割を果たしたと言えば少し違和感があるが、1950年代後半に石原慎太郎氏や福田恆存氏等が恋愛に関するアドバイスを「若い女性」に定期連載したことを考慮すれば、その影響は想像できる。「(美徳の）よろめき」と「永すぎた春」が一時流行り言葉になったこともこれらの小説が広く関心を集めたことを示唆する。

石原慎太郎の記事もある程度そうであるが、三島の娯楽小説は 家族中心の 高度成長時代の保守的イデオロギーと対照をなす生き方を読者に提供した。女主人公は中流階級の一般の主婦に考えられないような生活をして、恋愛関係と性生活の範囲で消費社社会の難を乗り越えた。この発表は三島の女主人公の生き方と女性誌で提供された生き方の類似点と相違点を探るものである。

ダンカン・アダム／ロンドン大学　アジア・アフリカ研究院　博士課程